



～身の回りの世界をどんどん広げていく準備～

見えにくさのある子ども、中でも盲の子どもは自分で移動することが制限されやすくなります。そのため、見えにくさのある子どもが自分の身の回りの世界を知り知識を増やすためには、彼らが興味を持ちやすい物や活動を準備して、実際に聞いたり触ったりする経験が必要です。

生後半年を過ぎると、早い子どもはうつぶせで這うように移動する「ずりばい」をする力がついてきます。このような様子が見られるようになったら、近くから声をかけながら、何か手を伸ばしたくなるような音楽や光が出るおもちゃを近づけて、自分の手でつかんで遊ぶ経験を始めてみましょう。そして、そこから自分で移動して遠くにある物を取りに行こうとする気持ちを育くみます。



10か月頃になると、はいはいをして色々なところに行ったり、つかまり立ちをするくらいの力がついてきますので、今度は少し離れたところから声をかけたり、子どもの好きな音の出るおもちゃや歌絵本で誘ってみましょう。親が子どもの目の代わりをしてあげて、子どもの見える、手の届く範囲の外にも楽しそうなことがあることを知らせ、行ってみたいなとわくわくするような気持ちをかきたてられるといいですね。また、部屋の中でもできるだけ同じ場所や位置関係で遊ぶようにすると、少し離れたところに自分で移動することも安心です。それでも移動することに不安を感じやすい子どももいますので、まずは、子どもの表情を確認しながら、安心して遊べる環境を整えましょう。そして、十分に慣れてきたら、位置関係を離したり、いつもとは違う部屋で遊ぶようにしたりして、安心して過ごせる世界を広げていけるとよいですね。



また、この頃になると、子どものわきの下を支えて立たせる支え立ちやつかまり立ちができるようになります。ベビーサークルはつかまり立ちの練習にはとても使いやすいです。お気に入りのおもちゃなどを、ベビーサークル越しに子どもの手が届く範囲に置き、立って手を伸ばせば届くようにします。最初から座った状態で離れたところにおもちゃを置いて、自分では移動して手にすることは難しいと思いますので、最初は親が子どもをつかまり立ちさせた状態にさせ、手を取っておもちゃを取るところまでお手伝いします。

子どもがおもちゃの場所や取り方に慣れてしまえば、今度は少しずつ支援を減らし、おもちゃの真下に座らせた状態から自分で立つように誘ってみるなど、段階を追って自分で動く量を増やしていきます。こうした支援の仕方は**逆行連鎖法**と言われるもので、ゴールであるおもちゃを手に取りやすい状況から徐々におもちゃを離して、自分で移動する距離を少しずつゴールから遠くしていく方法です。参考にしてみてください。



＜参考文献＞

五十嵐信敬 編著 「目の不自由な子の育児百科」 コレール社 1987